

8月第3週の礼拝 説教

■日 時：2022年8月21日（日）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「恵みが共にあるように」

■聖 書：テサロニケの信徒への手紙一 第5章23-28節（新約p379）

■讃美歌：18「こころを高くあげよ！」 532「やすかれ、わがこころよ、」

6月26日の主日礼拝から読み進めてきましたテサロニケの信徒への手紙一も、本日の礼拝で8回目になり、いよいよ最終回になりました。この手紙を読み始めた時に申し上げたことですが、テサロニケの信徒への手紙一は、紀元50年後半から52年前半ごろに、新約聖書の中では一番早い時期に書かれた書物であると言われています。また、その著者と言われる使徒パウロについては、使徒言行録の9章1~4節に次のように記されています。「1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。」つまり、復活の主イエス・キリストに出会うことによってその人生が劇的に変えられ、キリスト教が世界に広まる基礎を築く働きを担うことになった人物なのです。そのパウロが行動を共にしていたシルワノとテモテと連名で書いた手紙がテサロニケの信徒への手紙一とされていますので、この手紙を丁寧に読みますと、最初のころのキリスト者とキリスト教会の姿が浮かび上がってくるのです。

5章27節を今一度読んでみます。「この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように、わたしは主によって強く命じます。」とあります。では、どのような時にこの手紙は読まれたのでしょうか。1章の2節に「わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。」と記されていました。「わたしたちは、祈りの度に、」とありますから、少なくともこの手紙の差出人として手紙の冒頭に名前を連ねている、パウロ、シルワノ、テモテの3人はその祈りのメンバーであったということが出来ます。しかも、宛先は「父である神と主イエス・キリストとに結ばれているテサロニケの教会」というのですから、当然、彼ら3人も宛先であるテサロニケの教会の人々も「父である神と主イエス・キリストとに結ばれている」者たちの集いの中にいると言えます。ここで、是非思い出しておきたいのが、マタイによる福音書18

章 20 節の主イエスのお語りになった言葉です。「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」と記されています。教会というものを考える時に、その最小単位とみなされているのは、「二人または三人が主イエスの名によって集まるところ」であるということです。言い換えれば、私達のささげる礼拝の最少単位と言えましょう。一人で聖書を読み一人で祈ることもとても大切なことです。しかし、それを礼拝と呼ぶかどうかということになると、この主イエスの約束がその判断基準になるのではないかと私は考えています。テサロニケの信徒への手紙一に戻りますが、差出人であるパウロたち 3 人も礼拝の中で思いを一つにして祈りつつ記しており、宛先であるテサロニケの教会もまた、主イエスの名によって複数の者達が集まって礼拝をささげているのです。そのような中で、この手紙が読まれているということになります。このテサロニケの信徒への手紙一を皆様方と最初に読み出した礼拝の時に、私は今から 50 年以上も前の一つのエピソードをお話しました。そのことの繰り返しになりますが、キリスト教のことも聖書のこともほとんど知らずに、下宿の近くにあった教会に通い出したころのある日、当時用いていた口語訳聖書の中から、次のような御言葉が取り上げられたのです。「なぜなら、あなたがたが主にあって堅く立ってくれるなら、わたしたちはいま生きることになるからである。」今の私たちが読んでいる新共同約聖書では、テサロニケの信徒への手紙一 3 章 8 節の「あなたがたが主にしっかりと結ばれているなら、今、わたしたちは生きていると言えるからです。」と訳されている箇所です。今思いますと、この御言葉の中に私達が主の日に共に集められて礼拝をささげるといふことの深い意味が示されていたのですが、その当時の私は何一つ分かっていませんでした。

ところで、テサロニケの信徒への手紙一の示している状況は、次のようなものだったと思われれます。かつて、テサロニケに教会を立ち上げたパウロたちは、この時、テサロニケ教会から離れたところで主イエスの名によって集められて礼拝をささげている、そして、そのパウロたちによって祈られて記された手紙がテサロニケの教会の礼拝において読まれ聞かれています、ここに、主イエスが本当に臨在される礼拝が共にささげられていると言えるのです。そして、キリスト教の教会の礼拝は、いつの時代にあってもそのようになされてきました。そのように考えてまいりますと、テサロニケの信徒への手紙一そのものが、初めのころの教会の主の日の礼拝の記録である、と言えるかもしれません。

この手紙は、テサロニケの教会に集う人々のために 1 章 1 節で「恵みと平和が、あなたがたにあるように」との祈りをもって書き出され、そして本日の箇所 5 章 28 節で「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたと共にあるように。」と述べて締めくく

っています。つまり、この集いは、「恵みと平和が、あなたがたにあるように」との祈りによって始められ、「恵みが、あなたがたと共にあるように」と祈って閉じられているのです。私達のささげている礼拝、このこともまた同じです。私たちは一週間の間、この世において、必ずしも平和の中を歩んだわけではありません。また、霊も魂も身体も欠けが多く、決して非の打ちどころのない者ではなかったはずですが。しかし著者たちは、24 節で「あなたがたをお招きになった方は、真実で、必ずそのとおりにしてくださいます。」と力強く断言して言うのです。この力強さは、1 章 4 節にあるように、神様が「あなたがたをお選びになった方である」という確信に基づいています。私たちが、神様を信じ主イエスを信じていると言うのであれば、神様が私たちをそのように選んで招いて下さったからなのです。言い換えれば、信仰は、私たちが神様を信じることから始まるのではなく、神様が私たちを選び信じる者へと招いて下さったことから始まるのです。そこにこそ真実があるのです。28 節の「わたしたちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたと共にあるように。」という御言葉を読む時に、私はいつもコリントの信徒への手紙二の 13 章 13 節の「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。」を思い出します。一般的には、この箇所は礼拝の最後に祈られる祝祷の言葉として用いられています。牧師によっては、民数記 6 章 24～26 節の御言葉「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。」と続けて、祝祷にしていることもあります。ここでもまた、主の恵みと平安が与えられるようにと重ねて祈られています。私達のささげる礼拝、それはまさに、私たちのそのような祈りとそれに確かに応えくださる主の御臨在によって、今ここにあるのです。